
モガに対するまなざし、日本の『痴人の愛』から朝鮮の『迷夢』まで

関 スラ (大阪大学)

現存する最古の韓国のトーキー劇映画である『迷夢』(梁柱南監督、1936 製作、2005 年発掘)は京城撮影所の作品で、主婦愛純^{エスン}の背徳的な行為とその末路を描いている。一方谷崎潤一郎の小説『痴人の愛』(1924)の場合、西洋風潮に盲従する女、ナオミの魅力に溺れ、彼女の奴隷へと転落していく主人公が描かれた作品である。

これら作品の製作の背景には国家政策など政治的要因とともに当時大衆文化の状況もまた関係している事が推論できる。大衆文化の状況というのは、当時日本大衆文化の影響下にあった朝鮮の状況である。1920年代以降、当時近代日本には「良妻賢母」や「新しい女」など「近代」という同一の地平に根ざした様々な近代女性のイメージが存在した。とくに「モガ」はエロティシズム、享楽と奢侈など頹廢的なイメージがつきまどっていたにも関わらず、大衆文化において興行的にみれば比較的安定した人気を維持していたため、多くの作品の素材として良く扱われていた。その代表的な作品が『痴人の愛』である。同作品は大衆の大きい人気と名声を得た。しかし、近代化を進める一方、イデオロギーまで西洋化には前向きではなかった政府は「愛国的であると同時に健全であるもの」のイメージの普及に努めた。その時期日本においてモガを素材にし、モガに批判的なまなざしを始終送る映画が多数生み出されたことを、その流れとして理解することもできるだろう。こういった現象は当時朝鮮においても大きく変わらない。つまり、たとえ日本の朝鮮に対する植民地女性政策と『迷夢』との関係を証明する資料は提示できないとしても、『迷夢』を巡る製作条件や文化的脈絡、現象において解釈することで、同作品が日本大衆文化の変化の流れと共にしていることが類推できる。

また『迷夢』は、1930年代の朝鮮映画において、唯一ヴァンプ・イメージが登場する作品である。そのことから、大衆、そして以降の大衆作品に多くの影響を与えた『痴人の愛』のナオミのイメージと『迷夢』の愛純を比較する理由が明らかになる。ナオミの反抗と気変わり、そして消費行為は『迷夢』にて詳細に説明されていない愛純の反抗、消費、気変わりなどの想像的根拠として読み取ることができる。その故に、ナオミの行為の性質や性格が欲望のまた異なる形態として愛純にそのまま投影されている。

本論においては『痴人の愛』と『迷夢』の二人の女性キャラクターの類似点と相違点を比較、考察することで当時新しい女(とりわけモガ)に対する両面的態度——近代的女性を賞賛し、消費を助長する一方、女性を消費機械として描写する¹など——を把握したい。

¹ 雑誌『新女性』(1920年創刊)